

2016年5月17日

博士学位論文審査要旨

- 申請者 嶋口裕基 (名城大学准教授)
受理申請時(2016年1月26日)は名古屋女子大学専任講師。
2016年4月1日より現任校現職に着任。
- 論文題目 ブルーナーの「文化心理学」と教育論
—「デューイとブルーナー」再考—
- 申請学位 博士(教育学)
- 審査員 主任 藤井千春 早稲田大学・教育・総合科学学術院教授 博士(教育学)(早稲田大学)
副査 水原克敏 早稲田大学・教育・総合科学学術院教授 教育学博士(東北大学)
佐藤隆之 早稲田大学・教育・総合科学学術院教授 博士(教育学)(早稲田大学)
早川 操 相山女学園大学教授 Ph.D.(教育学)(コロンビア大学)

1. 本論文の目的と課題

本論文では、アメリカの心理学者 J. S. ブルーナー (Bruner, Jerome Seymour, 1915ー) の後期の教育論の構造と特色を明らかにすることが中心的な目的とされている。そのために本論文では、ブルーナーの前期の教育論以後のブルーナーの心理学や文化についての研究の発展が辿られて、その過程を通じて後期の教育論の構造がどのようにして構成されたのかが分析され、その構造によって後期の教育論にどのような特色が示されているのかについて考察されている。また、このことから、ブルーナーの後期の教育論とジョン・デューイの教育論との関連について、新たな観点からの検討が試みられている。

周知のように、ブルーナーは、『教育の過程』(1960)において、学問中心主義の授業方法とカリキュラム原理を提案した。そして、ブルーナーの教育論は、科学技術が日進月歩する時代において、国民の知的優秀性の育成が課題とされていた時代状況の中で、教育の現代化運動の理論的支柱として、アメリカのみならず我が国の教育界にも大きな影響を与えた。一般的には、『教育の過程』など 1970 年頃までのブルーナーの教育論は、デューイの教育論に替わるものであると評価されている。すなわち、子どもの生活やそこにおける興味関心を重視し、それに基づいた学習法やカリキュラム原理を提唱していた進歩主義教育運動の理論に替わるものとして位置付けられている。

しかし、本論文では、まず、『イギリスの家庭教育外保育』(1980)における幼児の言語獲得についての研究から、『意味の復権』(1990)における「文化心理学」の提唱に至る間のブルーナーの「心」(mind)についての理論形成の過程が辿られている。そして、「文化心理学」における研究成果、すなわち「心」についてのブルーナーの理論に基づいて、『教育という文化』(1996)では、『教育の過程』に代表される前期の教育論とは異なった、新たな教育論が提唱されていると論じられている。そして、「心」が文化との相互作用を通じて形成されるという、構成主義的な学習論が後期の教育論の特色となっていることを明らかにしている。そのような点から、筆者は、ブルーナーの後期の教育論をデューイの教育論と連続的に位置付けることができると論じている。

2. 本論文のテーマ

本論文は、大きくいうと、次の3つのテーマから構成されている。

- ① 「文化心理学」の提唱に至る過程で、特に「心」の形成に関する研究を通じて、ブルーナーの教育についての考え方がどのように変化したか。
- ② 『教育という文化』に代表される後期の教育論は、どのような構造と特色を有するものとして構成されたのか。
- ③ ブルーナーの後期の教育論とデューイの教育論とを、どのような関係において捉え直すことができるか。

第一のテーマに関しては、ブルーナーの研究的関心が、知覚の研究から乳幼児の言語獲得研究へと変遷していく過程を丹念に辿ることを通じてアプローチされている。そのようにして、ブルーナーが「心」の形成に対する文化の果たす役割についての認識を深めていったことが明らかにされている。

第二のテーマに関しては、『教育という文化』において教育論を構成する中心的概念である「ナラティヴ」と「フォークペダゴジー」に焦点が当てられている。そして、それらの概念の意味を検討することを通じて、ブルーナーの後期の教育論の論理構造が描き出されている。そのようにして、そこに見られる「構成主義」(constructivism)としての特色が明らかにされている。

第三のテーマに関しては、ブルーナーのデューイに対する論評に見られる態度の変化が取り上げられている。また、ブルーナーの「ナラティヴ」と「フォークペダゴジー」をデューイの教育論の発展として位置付けることの可能性について検討されている。そのようにして、デューイの教育論とブルーナーの教育論を発展的連続として捉えるための視点が提案されている。

3. 本論文の構成

本論文では、先に示した3つのテーマに関する論述が、9つの章において連続的に発展する形式で展開されている。

プロットは、次のように組まれている。

序章

1. 本研究の目的
2. 先行研究に対する本研究の位置
3. 本研究の課題と方法
4. 本研究の構成

第一章 「文化心理学」の形成過程1—生い立ちから第二次世界大戦まで

1. 大学入学まで
2. デューク大学時代
3. ハーバード大学大学院と第二次世界大戦

第二章 「文化心理学」の形成過程2—知覚の研究から乳幼児の言語獲得研究まで

1. 知覚の研究
2. 思考の研究
3. 教育の研究
4. 発達の研究
5. 乳幼児の言語獲得研究
6. まとめ—乳幼児の言語獲得研究までの「知ること」の探究の到達点

第三章 「文化心理学」の構造

1. 「文化心理学」提唱の背景
2. 「文化心理学」における「意味」・「解釈」・「間主観性」・「文化」
3. ブルーナーの「文化心理学」における「心」と「文化」

第四章 形成過程から見る『教育という文化』における教育論の特徴

1. 「文化心理学」と教育
2. 『教育という文化』の形成過程1—就学前教育論と『教育という文化』の関連性
3. 『教育という文化』の形成過程2—知覚の研究と『教育という文化』の関連性
4. 「文化心理学」提唱後に展開された教育論の特徴

第五章 「二つの思考様式」と「構成主義」の吟味

1. 「二つの思考様式」の吟味—思考様式の二分法を中心に
2. ブルーナーの「構成主義」の吟味

第六章 「二つの思考様式」と教育

1. 「ナラティヴ」の教育的地平
2. 教育における「二つの思考様式」の関係性

補節 ブルーナーの「構造」の再検討

第七章 「フォークペダゴジー」

1. 「フォークペダゴジー」の概観
2. 「文化心理学」提唱前の教育論に見る「フォークペダゴジー」の萌芽
3. 「フォークペダゴジー」の核心―「教授」の「間主観性 - 志向的アプローチ」
4. 「フォークペダゴジー」の可能性

第八章 「デューイとブルーナー」再考の必要性

1. ブルーナーによるデューイのいう「道徳」の是認
2. 「言語と経験」のデューイ解釈
3. ブルーナーとデューイの言語獲得論における関係性
4. 「デューイの後」と「言語と経験」との間のデューイ解釈の差異について
5. まとめ―「デューイとブルーナー」再考の必要性

第九章 「デューイとブルーナー」再考―「文化心理学」提唱後に展開された教育論の再解釈

1. ブルーナーの「文化心理学」とデューイの「文化的自然主義」
2. 「探究」についての「反省」としての「ナラティヴ」
3. 「成熟と未成熟の相互作用」としての「フォークペダゴジー」の射程
4. まとめ―「文化心理学」提唱後に展開された教育論の再解釈

終章

1. 本研究の要約
2. 本研究の成果と今後の課題

4. 各章の概要

序論では、本研究の目的が提示されている。すなわち、ブルーナーの後期の教育論を取り上げ、前期の教育論からの変容過程を辿り、後期の教育論の特色を明らかにするとともに、デューイの教育論との新たな比較を試みることである。そして、ブルーナーの教育論、及びブルーナーとデューイの相互の教育論の比較・考察を行った先行研究が整理されて、先行研究に対して本研究が有する新しさが示されている。その上で、本論文の課題にアプローチするための3つのテーマが提示されている。すなわち、①「文化心理学」の提唱に至る過程で、特に「心」の形成に関する研究を通じて、ブルーナーの教育についての考え方がどのように変化したか、②『教育という文化』に代表される後期の教育論は、『教育の

過程』に代表される前期の教育論に対して、どのような新たな特色を有しているのか、③ブルーナーの後期の教育論とデューイの教育論とを、どのような関係において捉え直すことができるか、である。

「第一章 「文化心理学」の形成過程 1—生い立ちから第二次世界大戦まで」では、ブルーナーが本格的な研究を開始する以前において、研究に対する素地がどのように整えられたのかについて、『自伝』やオルソンのブルーナー研究などに基づいて紹介されている。そして、大学、大学院時代、及びその後の経歴において、「知ることの本質」を解明することに対する関心、また「構成主義」的な発想が芽生えていたことが紹介されている。

「第二章 「文化心理学」の形成過程 2—知覚の研究から乳幼児の言語獲得研究まで」では、「文化心理学」が提唱される以前の、すなわち、知覚の研究から乳幼児の言語獲得研究までのブルーナーの研究関心の変遷について述べられている。そして、この時期におけるブルーナーの関心は、「知る」ことが、ある特定の「知り方」に基づく知的活動であるという前提から、そのような「知り方」がどのように獲得されるのかについての研究に向けられていたことが明らかにされている。そのような関心からブルーナーが乳幼児の言語獲得研究に取り組み、そこからブルーナーが知ることをめぐって、「意図」、「志向性」、「間主観性」という三つの概念を導き出したと論じられている。

「第三章 「文化心理学」の構造」では、ブルーナーの文化心理学を構成する諸概念の意味と相互関係について解説されている。そして、まず、ブルーナーのいう「文化」について、人々の間で相互理解を可能とする意味生成のための「通常性」・「規範」・「標準」であると論じられている。つまり、ブルーナーにとって「文化」とは、他者と共に間主観的に共有されているものであり、それによって他者の「心」にある「意図」などを知ることが可能となるとともに、自らの「心」にある「意図」を他者に伝えることが可能になると、ブルーナーのいう「文化」が「心」の機能において果たす役割について論じられている。そのようにして、「文化」と「心」の関係についてのブルーナーの捉え方が明らかにされている。そして、このような「文化」と「心」についての捉え方に基づいて、ブルーナーの文化心理学では、「知り方」はそれぞれの「文化」によって規定されていること、また、人はそのような「知り方」を、その「文化」の内部で他者との相互作用を通じて獲得するとされていることが説明されている。そのようにして、ブルーナーの教育論の有する「フォーカペダゴジー」としての特質について明らかにされている。

「第四章 形成過程から見る『教育という文化』における教育論の特徴」では、ブルーナーの文化心理学提唱後の教育論の特色について、「文化」が「心」を創るという論点に基づいて考察が深められている。そして、ブルーナーが、「知る」という自分の「心」の機能は、相手の「心」という相手の「志向状態」を読み取ることによる、いわば「間主観性」に基づく機能であり、そのような「心」の機能が「文化」によって創り出されると論じている点に、ブルーナーの文化心理学提唱後の教育論の特色があると明らかにされている。

「第五章 「二つの思考様式」と「構成主義」の吟味」では、ブルーナーの後期の教育論の中心概念である「ナラティヴ」の意味について検討と考察がなされている。まず、「ナラティヴ」(生成的説明)と「論理-科学的様式」(構文論的説明)という、ブルーナーのいう「二つの思考様式」が取り上げられて検討されている。そして、ブルーナーが、両者について、どの文化においても普遍的に見られるものの、対立的あるいは主従的な関係としてではなく、思考についての相補的な様式として捉えられていることを明らかにしている。次に、ブルーナーが「始原的実在」を否定したことに対してなされた「独我論」という批判を取り上げ、ブルーナーのいう「間主観性」の意味について考察することを通じて、そこからブルーナーの教育論の「構成主義」としての立場を明らかにしている。

「第六章 「二つの思考様式」と教育」では、ブルーナーのいう「ナラティヴ」について、また「論理-科学的様式」との相補的關係についての分析と考察、さらには教育において二つの思考様式がどのように相補的關係にあるのかについての検討が行われている。そして、「ナラティヴ」が自己の安定、歴史の把握、他者の理解、文化の内化、トラブルの解決に関わるものであり、文化の中で鍛え育まれたものであることが述べられている。そして、「二つの思考様式」は、ブルーナーの論においては、どちらかの思考様式がうまく機能しなくなったときに、その原因の解明や新たな発見の促進など、相補的に機能すると捉えられていることが論じられている。

「第七章 「フォークペダゴジー」」では、ブルーナーの「文化心理学」提唱後の教育論の中心概念となる「フォークペダゴジー」の概念について、「フォークサイコロジー」との關係において分析・考察が行われている。そして、「フォークサイコロジー」が、コミュニケーションにおいて、共有する文化を手がかりにして、他者の「心」を理解するための「心」の機能に関することがらであり、「フォークペダゴジー」は、教育の場面において、教育者と学習者との間でのコミュニケーションを同様の観点からとらえた「心」の機能に関することがらであると論じられている。

「第八章 「デューイとブルーナー」再考の必要性」では、ブルーナーの「文化心理学」が機能主義に立っていること、また前期の構造主義から機能主義の立場への転換が乳幼児の言語獲得研究によって遂げられたことが指摘されている。そして、そのことがその後、ブルーナーがデューイの言語論や道徳論に対して肯定的に評価するための視点となったと論じられている。このようにしてブルーナーとデューイの教育論とを発展的連続として捉える接点が示されている。

「第九章 「デューイとブルーナー」再考-「文化心理学」提唱後に展開された教育論の再解釈」では、ブルーナーの「文化心理学」に対するヴィゴツキーからの影響について検討され、それによって形成された「意味生成」の枠組みが、デューイが文化的自然主義において論じた「探究」の枠組みと類似していることが指摘されている。そして両者(デューイとブルーナー)の比較検討を通じて、ブルーナーのいう「ナラティヴ」を、デュー

イのいう「探究」についての「反省」の様式として捉えることができ、また、「フォークペダゴジー」を、子どもと文化（教材）との相互作用の方法として捉えることができると論じられている。そのようにしてブルーナーの教育論をデューイの教育論からの連続的發展として捉えるための論拠が提起されている。

「終章」では、本論文の論旨が整理・まとめられるとともに、今後の課題が示されている。すなわち、ヴィゴツキーを観点とした時のブルーナーの「文化心理学」以後の教育論についての解釈と、デューイの「文化的自然主義」を観点とした解釈との対比・整理・関係付けを進めていく必要性が示されている。

5. 本研究の意義

本研究の第一の意義は、ブルーナーの後期の教育論が、ブルーナーの「文化心理学」の研究成果の一つとして位置づくことを明らかにした点にある。本研究では、ブルーナーが「文化心理学」を提唱した以後の教育論の構造と特色について、「文化心理学」の提唱に至るまでのブルーナー自身の研究の発展による諸理論の生成や変化を詳細に踏まえて丹念に論じられている。つまり、ブルーナーの後期の教育論を構成する「ナラティヴ」や「フォークペダゴジー」などの諸概念が、ブルーナーが「文化心理学」で提唱している「文化」と人間の「心」の関係についての研究成果に基づいて構造化されていることが、ブルーナーの「文化心理学」の形成過程も踏まえて丁寧に論証されている。そして、そのことに基づいて、ブルーナーの後期の教育論には構成主義としての特色が示されていると論じられている。このように本研究では、前期以後のブルーナー自身の研究の発展が総合的に把握された上で、後期の教育論の構造と特色が、「文化心理学」との関連において論証的に明らかにされている。本研究は、ブルーナーの後期の教育論についての体系的な研究としての価値を有している。

本研究の第二の意義は、ブルーナーの教育論についての内外の先行研究が広く網羅されている点にある。特にわが国における先行研究についてはほぼ網羅されている。そして先行研究のほとんどがブルーナーの前期の教育論に焦点が当てられ、しかもそれらがデューイの教育論と対立的に捉えていることを明らかにしている。そのようにして本研究の新規性と独自性が明確にされている。ブルーナーの教育論研究についての研究として、本研究は、その一部分についても研究史研究としての価値を有している。

本研究の第三の意義は、ブルーナーの「文化心理学」とデューイの「文化的自然主義」との類似性について考察すること、また、「ナラティヴ」をデューイのいう「探究」についての「反省」という観点からその意義について考察することを試みている点にある。そのようにして、本研究では、両者の教育論について、従来のように対立的にはなく、新たに発展的・連続的に捉えるための観点を提起している。ブルーナーの教育論については、

すでにヴィゴツキーの教育論との関連性については研究が開始されている。しかし、後期の教育論とデューイとの関連性については開始されていない。確かに上に示したデューイとの類似点についての指摘は、まだ仮説的な提起に留まる。しかし、今後のブルーナーの教育論についての研究の新たな展開の方向性のみならず、デューイの教育、思考、学習などに関する理論を構成主義的な観点から再評価していく上でも、重要な方向性を示している。

6. 総評

本研究では、先に述べたように、ブルーナーの前期から後期における「文化心理学」の提唱に至るまでの研究の発展の過程が踏まえられ、「文化心理学」における研究成果に基づいて、それとの関連において後期の教育論の構造と特色が明らかにされている。この点で、本研究は、ブルーナーの教育論について体系的に考察し、その新たな価値について後期に焦点を当てて描き出した研究として評価することができる。このようなブルーナーの後期の教育論についての体系的な研究はわが国においては初めてのものである。世界的に見ても萌芽的な研究として位置付くものである。この点でブルーナーの教育論に関する先行研究群を大きく超えた進歩的な研究といえる。本論文の筆者はすでにブルーナーの後期の教育論に関する研究論文を多数発表しており、それらは日本におけるブルーナーの教育論研究として参照されて高く評価されている。本論文は今後のブルーナーの教育論についての研究において、新たな観点からの研究上のモデルとなるであろう。

しかし、デューイとの関連について本論文で提起された論点はなお仮説に留まる。審査員からは、デューイの諸著作で論じられている教育、思考、学習などについての理論をさらに研究したうえで両者の関連を論証し、それにより両者それぞれの教育論の新たな意義を明らかにすること、あるいは、逆に、デューイやヴィゴツキーとの比較から解放されて、ブルーナーの教育論の独自の意義を明らかにすることなどの課題が指摘された。

これらの指摘は、本論文が研究的にさらなる発展の可能性を有していることを示唆するものである。本論文の到達点から、プラグマティズムの教育論の再評価をめぐり、新たにそれを充実させ得る新たな研究の方向性を展望することかできる。

以上から審査員は全員一致で、本論文が博士（教育学）の学位を授与するに値する研究であると判断した。